

きみはサンダーバードを知っているか

サンダーバードと法を考える会◆編

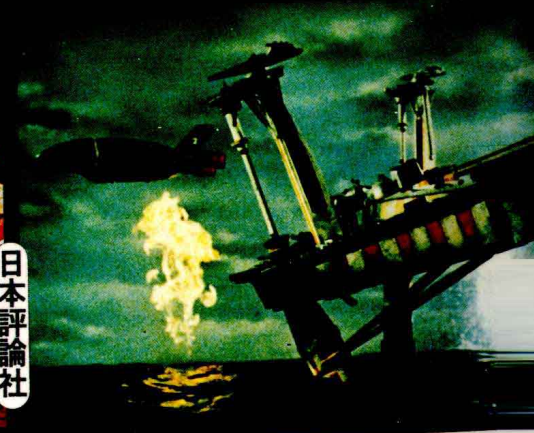
【コーディネーター】水島朝穂

an Alternative Way
to Keep the EARTH

もう一つの地球のまもり方

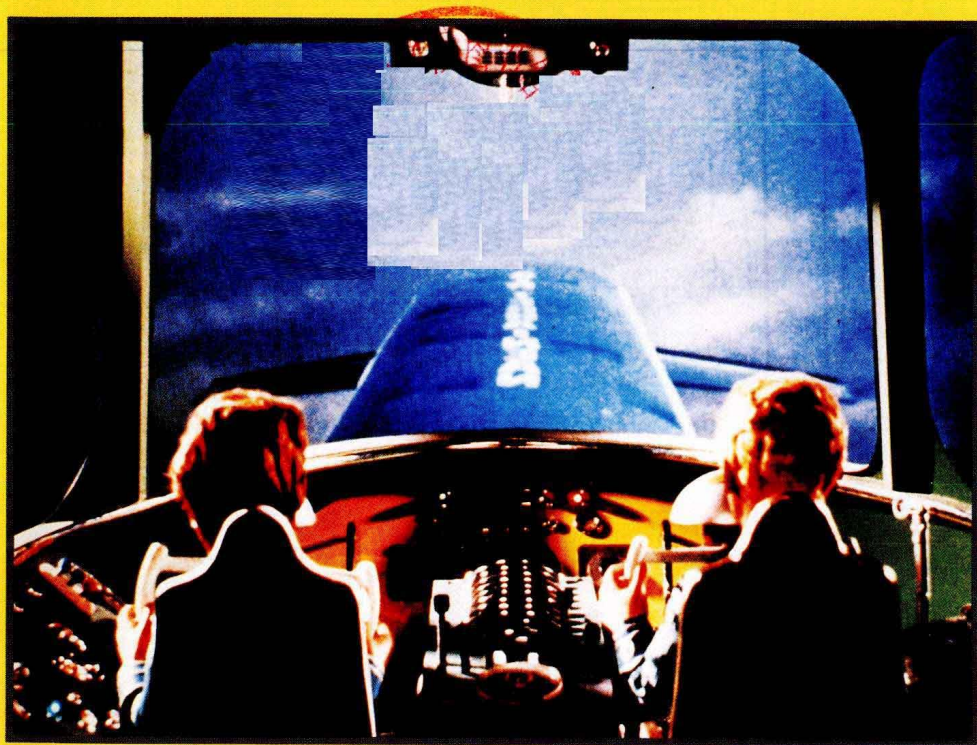


日本評論社



サンダーバードを 知っているか

もう一つの地球のまもり方



©1992 東北新社

サンダーバードと法を考える会◆編

【コーディネーター】

水島朝穂



日本評論社

●サンダーバードと法を考える会・メンバー紹介.....

伊藤雅康(いとう・まさやす) 1963年生・札幌学院大学講師

彼谷 環(かや・たまき) 1966年生・広島大学大学院

倉持孝司(くらもち・たかし) 1952年生・朝日大学助教授

立山紘毅(たちやま・こうき) 1959年生・山口大学助教授

中富公一(なかとみ・こういち) 1953年生・岡山大学助教授

水島朝穂(みずしま・あさほ) 1953年生・広島大学助教授

きみはサンダーバードを知っているか もう一つの地球のまもり方

1992年11月17日第1版第1刷発行

1992年12月10日第1版第2刷発行

コーディネーター.....水島朝穂

編者.....サンダーバードと法を考える会

発行所.....株式会社日本評論社

東京都豊島区南大塚3-10-10 ☎170 ☎03(3987)8611 振替/東京0=16

印刷・製本所.....精文堂印刷株式会社

写真.....東北新社、共同通信社、毎日新聞社、川井 聡、水島ゼミ

装幀.....片岡 理

©サンダーバードと法を考える会

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写・転載・磁気媒体への入力などを行なうことは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となります。そのような場合にはあらかじめ小社に許諾を求めてください。

ISBN 4-535-58060-X

Printed in Japan

きみはサンダーバードを知っているか
もう一つの地球のまもり方



© 1992 東北新社

「グラビア」勝手にシミュレーション

もし、サンダーバードがカンボジアへ行ったら

軍隊無用の究極の選択
サンダーバードがやってくる……………4

1 アイデンティティ欠乏症の自衛隊を診る
サンダーバードVS自衛隊

- ◆人命救助組織サンダーバードが、軍隊か……………16
- ◆「人命優先」か、「国家」優先か……………24
- ◆信頼・自発性・連帯愛か、命令・服従・制裁か……………32
- ◆人命救助・建設か、殺人・破壊か……………40
- ◆普遍的人間教育か、特殊な専門軍事訓練か……………48
- ◆人命救助に徹しているか、諜報・謀略活動か……………58
- ◆人命救助・災害救助は非軍事の救助隊で……………64

2 ホントの国際貢献を教えます

サンダーバードに学べ

◆日本は国際社会で何をするべきなのか……………69

◆原発がアブナイ……………88

◆みんなに食糧を……………92

◆災害はくいとめられる……………96

◆火山の噴火が起きたら……………100

◆ナイチンゲールの精神で……………104

◆哲学ある科学技術を……………108

3 違憲で危険なPKO協力法

◆憲法に反するPKO協力法……………112

◆検証！PKO協力法……………125

◆国際緊急援助隊派遣法もかえられた……………141

4 発進！ニッポン国際救助隊

◆サンダーバードにならないPKO協力法はいらない……………148

◆ニッポン国際救助隊法(第二次)案を提案する……………150

主要参考文献……………161

あとがき……………164

軍隊無用の究極の選択

サンダーバードがやってくる

一九九二年六月十五日（月曜日）午後八時二九分、東京都千代田区永田町二丁目七番一号。そこにそびえ立つ国会議事堂。その衆議院本会議場で、「国連平和維持活動（PKO）等に対する協力に関する法律」（以下、本書では略して「PKO協力法」という）が可決・成立した。そして自衛隊派遣を含む「国際緊急援助隊の派遣に関する法律の一部を改正する法律」（以下、本書では略して「国際緊急援助隊派遣法改正法」という）も成立した。一九九四年六月二日（水曜）に参議院が「自衛隊の海外出動を為さざることに関する決議」を行ってから一三八九四日目にして、自衛隊の海外出動への道が開かれたのである。

同じころ、地球の反対側のブラジル・リオデジャネイロ。そこでは、「地球サミット」（環境と開発に関する国連会議）が、全日程を終了して閉幕していた。われらが宮沢首相は、そんなわけで主要国の首相でただひとり欠席。ビデオ出演で「参加」しようと試みたものの、「永田町の常識」は世界の非常識という月並みな真理を立証しただけだった。

六月半ばのこの二つの出来事は、こうして日本の「国際貢献」をめぐる壮たる「ボタンのかけ違い」を象徴する出来事となったのである。

◆地球はいま、あらゆる危機に瀕している

冷戦と湾岸戦争の「二つの戦後」。その「戦争後遺症」は、世界中で傷口を疼かせている。「東側」諸国では、国境をこえ、国家の枠をこえた民族紛争が続く（旧ユーゴスラヴィアや旧ソ連の惨状をみよ）。アメリカを中心とする「西

側」諸国でも、冷戦によって肥大化してきた軍事官僚機構や、これをマーケットにして増殖してきた軍需産業が、生き残りに懸命である。とりわけアメリカは、「新たな危機」「新たな戦争」を求める衝動を隠さない（ニューヨーク・タイムズ紙がスクープした「国防計画指針」をみよ）。一方、「第三世界」諸国では、「冷戦の重し」が外れて、部族間、民族間、信徒間の対立がストリートに露出してきた。アフリカ・ソマリアの飢餓危機は、その悲惨な結果の一例である。

だが、問題は、そうした人間社会の対立だけにとどまらない。いまや地球全体が、緩慢なる「滅び」の道を歩んでいるのだ。

たとえば、一八五〇年代、世界の森林面積は六〇億ヘクタールもあつたのに、それが現在では四〇億ヘクタールしかない。毎年イギリスの面積に匹敵する二〇〇万ヘクタールの熱帯雨林が消失しているという。また、世界の二酸化炭素排出量は年間約六〇億トンにもなり（その七割近くが先進国）、地球の温暖化は進むいつぼうだ。さらに、旧東独をはじめ旧「社会主義」諸国の悲惨な環境破壊。これらの諸国の原発の実情は、「チェルノブイリ」的状况の前夜を思わせる。海洋や地上に散らばり、あるいは腐食が進む核兵器、化学兵器が環境に与える影響も無視できない。湾岸戦争がもたらした環境破壊の影響の深刻さは触れるまでもないだろう。海洋、地上を問わず各種の汚染・破壊が進み、生態系の破壊も起きている。「環境戦争」はすでに始まっているのだ。

自然と共生する人類社会づくりをめざす「地球サミット」では、大量生産、大量消費、大量廃棄の生活パターンそれ自体も問われた。人類はいま、冷戦と湾岸戦争の「二つの戦後」の戦後処理と、環境戦争と複合型民族紛争の「二つの戦

地球全体が「滅び」の道を歩んでいる。

前・戦中」への対処が求められているのである。

◆憲法の示す道すじ

半世紀近く前に制定された日本国憲法は、実に先駆的であった。

「われら〔日本国民〕は、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」（日本国憲法前文第二段）。

平和とは、戦争がないこと（戦争の不在）だけを意味するのではない。抑圧、貧困、飢餓、疾病、環境破壊、放射能汚染など、人間の存在の基礎を脅かすあらゆる「構造的暴力」があるかぎり、真の平和はありえないのだ。この「構造的暴力」からの解放を「積極的平和」という（J・ガルトウング）。日本国憲法は、まさに、「平和に生きる権利」の主体を、日本国民のみならず「全世界の国民」としたのである。憲法は、日本国民が世界の国民のために、「恐怖と欠乏」のさまざまな形態を含む「構造的暴力」克服のための積極的努力を求めているといえるだろう。それは、憲法九条の要請から、非軍事的手段によらなければならない。これこそが、真の「積極的平和主義」であり、「平和的国際貢献」と呼ぶるものである。

◆なぜカンボジアに自衛隊がいくのか

だが、ここ一、二年、この日本国憲法の前文をつまみ食いに解釈して、自衛

隊を外に出すことが「国際貢献」であり、「積極的平和主義」であるかのような主張がアツケラカンと、大手を振ってまかりとおるようになってきた（自民党小沢調査会答申）。そして、あたかもカンボジアに自衛隊を派遣することが、日本におけるPKOの重大問題であるかのように問題が矮小化されてきた。だがよく考えてみると、これには、大きく二つの疑問が生じてくる。世界中に危機的地域はたくさんあるのに、なぜカンボジアなのか。そして、なぜ自衛隊なのか。

◆なぜ、カンボジアなのか

七〇年代半ばに、ポル・ポト政権が自民族の大量虐殺を行っていたとき、いったいどれだけの国がこれを非難し、蛮行をやめさせる努力をしたか。そして国連はどう対処したか。いま、カンボジアでは、中国軍工兵部隊がPKOに参加して、道路復旧を行っている。だが、かつてポル・ポト政権の後楯にいたのは、中国だったのである。それなのに中国はそのことに対してあやまりもしなければ反省の色もない。PKOに参加さえすれば「罪」は「浄化」されるとでもいうかのようだ。PKOがこんなにもてはやされるようになったのは、とりわけ湾岸危機以降のことである。猫も杓子も日本もと、いま、PKOはブームなのだ。

そもそも、国連が行う平和維持活動だからといって、PKOを手放しで評価することはできない（「参加することに意義がある」といいながら、現実にはやっぱり「金」（メダル）獲得競争になっているオリンピックの例もあるように）。

日本や欧米の大国が、カンボジアに、巨大プロジェクト、各種天然資源へのア

平和への道すじは、
日本国憲法が示している。

クセスを含め、「金のなる木」を見出していないと断言できようか。大国が冷戦後の状況のなかで、PKOに関わってきたウラには、こうした意図がしつかり隠されている。さらに、六月中旬に出されたガリ国連事務総長の報告では、旧ユーゴスラヴィアの事態を念頭に置いて、重武装の「平和実施部隊」を、当事者の合意がなくても予防的に派遣しようという提案までされている。停戦後に、紛争当事者の合意のうえで派遣されるという従来のPKOのパターンからみれば、これはあきらかにひとつの「変質」といえる。

防衛大学校卒のある二等陸佐は言う。「〔PKOを〕アメリカとしての国益を追求するための手段に使おうとしているわけです。それは日本だって同じだと思っんですよ。世界に貢献をして、それによって名誉ある地位を得るといいますか、経済力にふさわしい政治的地位を得る、それから日本人として国際的な貢献をするというような国益なり国家目的のためにPKOを使うんだよということをしっかりと腰を据えてやってもらわないと、変な逃げでは、とんでもない誤りになるだろうと思います」（佐賀保『海を渡った新自衛隊』OKプロ）と。

カンボジア民衆をだしにした、大国の独善的で自分勝手な「国際貢献」にならないよう、「ピン（P）からキリ（K）までおせっかい（O）」といわれないう、PKOに対する協力には、自主的な判断と態度が必要である。今後、PKOへの派遣国には大国を含まず、できるだけ中立的諸国にすることも重要であろう（ドイツ連邦軍のPKO派遣に反対する「意見広告」*Süddeutsche Zeitung* 27./28. April 1991, S.6）。

カンボジアはかつての仏印（フランス領インドシナ）である。ここは旧日本軍

が侵略行為をはたらき、その「傷」がまだ疼いている地域である。それなのにそこへ、彼らにとつては許しがたい日本の軍隊を送ろうというのだ。たとえそこでの仕事が道路の復旧といつても、それを行う工兵部隊（自衛隊では施設科という）はあきらかに軍隊である。普通の土木作業員ではない。橋や道路の復旧もやるが、その破壊も仕事のうち。地雷除去だけでなく、敷設も行う。「いざという時には全員が銃をとつて歩兵なみに戦闘ができるように装備、訓練されている」（志方元北方總監『週刊ポスト』九二年九月四日）れっきとした軍隊なのである。

◆なぜ自衛隊か——軍活用の論理

ようするに自衛隊を「出す」側にとつては、UNTAC（国連カンボジア暫定行政機構）という「進駐軍」の一角を担ったんだという事実が重要なわけである。その後の経済活動のために、「私もやりました」というアリの効果である。だから、現地で「小規模で目立つ役を」（志方元北方總監『アエラ』九二年六月一六日号）と、ことさらに「目立つ」ことが強調される。自衛隊員に多少の犠牲でも出たほうが美しいんじゃないかというのが、「出す」側の本音だろう。だが、そんなことは「出される」側の自衛隊員とその家族にとつて、いい迷惑である。とりわけ、自衛隊をひとつの「就職先」として選択し、定年まで勤めるつもりで生活設計してきた、妻子ある曹クラス（下士官）の隊員の心労はいかばかりか。

日本は「必要最小限度の実力」ということで自衛隊をもったが、それはあくま

PKO、
ピン(P)からキリ(K)までおせっかい(O)。

でも「専守防衛」のためであった。ところがこの方針が大きく転換した。日本は、国際政治において、最終的には軍事力を出せる国家になろうとしている。「日本よ、普通の国家たれ」。そこには、依然として、軍事力信仰がある。

自衛隊は、その組織・編成、装備、訓練等にいたるまで、仮想敵国Ⅱソ連との対決を基本としており、しかも日米安保体制の枠内で、米軍との「一蓮托生」性を色濃くもっている。こうした日米安保体制下の自衛隊の現状をそのままにしておいて、その一部の機能（衛生・施設関係に限定された場合でも）を国際的に活用するという発想はいかにも安易であり、かつ危険である。違憲の軍隊としての「本来の任務」と、「民生支援」や「災害派遣」といった「余技」の部分とは、じつは密接な関係をもつのである（大規模地震時の自衛隊の対処行動にあきらか）。「余技」の部分をより多く行うことで、自衛隊が合憲になるわけではないのである。災害対策等を、いつまでも軍隊の「余技」に依存するという状況は改められなければならない。防衛計画の大綱の見直し程度で満足せず、もつと抜本的な軍縮計画を打ち出し、最終的に、軍隊とは別の組織に転換していかなくてはならないのである。それにより、長年にわたる憲法違反の状態が解消されとともに、憲法の平和主義に新しい可能性が開かれることになることだろう。

◆軍隊のない世界をめざして

各国が重装備の常備軍を保持して、国の安全を保つ時代は終わった。

諸国民の生活の基礎を脅かす新しい脅威には、オゾン層破壊、熱帯雨林の激減、

森林枯死、人口爆発、飢餓危機、泥沼化からヘドロ化に向かう民族紛争等々がある。一国的性格をもつ伝統的な紛争解決の手段は、これらの問題については有効ではない。

軍事的安全保障の目的は、国境の確保、領土保全だが、環境安全保障は環境的生活の基礎の保全を目的とする。これからの安全保障は、国家安全保障でなく、地球的な規模での国際的環境安全保障でなければならない。民族紛争の解決も、軍事力の投入・威嚇によってではなく、その地域の貧困や疾病、不平等といった対立の根源そのものをなくしていく粘りづよい努力こそ重要である。

そうしたとき、軍隊に「余技」として与えられている災害救助・環境保護任務を、専門的に遂行する新たな組織の設置が求められている。

◆聞け、サンダーバードのメッセージ

では、軍隊ではなく、どんな組織が有効なのか。

それを考えるには、ひとつの格好の参考書がある。

一九九二年四月二日からテレビ東京系で始まった「サンダーバード」というイギリスのテレビ人形劇である。この番組は一九六六年四月一〇日、NHKで初放映されて以来ブームを巻き起こした（世界九八カ国で放映）。これが、二六年の歳月を経て、世紀末の世界に新しいメッセージを発信している。

「サンダーバード」とは、人命救助のため、最新のメカを駆使して世界各地に派遣される民間の国際救助隊 (International Rescue) のことである。マッハ二

非軍事の国際救助組織の設立を。

一・九の超高速で災害現場に急行する「移動指令室」の1号。各種救助メカ（最大積載重量一二〇トン）を現場に運ぶ超音速輸送機の2号。宇宙空間の災害に対処する単段式宇宙ロケットの3号。水中での救助活動に従事する単座小型潜行艇の4号。世界中どこからの救助要請もキャッチする情報収集用静止軌道衛星の5号。このほか、2号のコンテナには、各種救助メカが満載されている。

多彩なハイテク・メカを駆使して、油田火災、原子炉事故、高層ビル火災等々、人類が直面するさまざまな災害危機に対処する非軍事的民間組織。それが「サンダーバード」である。いかなる国家にも所属せず、また援助をうけない独立採算の組織で、世界のどこにでも、分け隔てなく救助に向かう。隊員が一つの家族というのも、国家間の対立をこえるメッセージが含まれているように示唆的だ。カンボジアに派遣される自衛隊みたいに「目立つ」ことに意味をもたせることもなく、困っている人の所へ、どこからともなくやって来て、めざましいはたらきをして、そしてどこへともなく去っていく。謙虚なボランティア精神。ここにも、「サンダーバード」の志の大きさがある（もつとも、レディ・ペネロープのスパイ・エージェント組織、ピンクのロールスロイス「ペネロープ号」に搭載されたマシンガンとミサイル等、ストーリーとしては魅力的だが、冷戦時代の制約を免れない部分もあるが）。

「サンダーバード」の発する「人命救助優先」のメッセージを解読すれば、今日起こっている、また今後起こりうるさまざまな事態にどのように対処すべきかが明示されるにちがいない。

憲法九条によって、世界に無軍備平和・安全保障の道を提示した日本が、率先

して軍縮を実施し、非軍事の「ニッポン国際救助隊」を設立して、世界の人々のために役立てる。これこそ、日本国憲法が期待する真の「国際貢献」の道とはいえないだろうか。

易経（易学）の一部門である九星気学では、一九九二年は「八白土星」の年にあたり、その意味するところは、「地球、土地、つなぎ目（国境）、改革」という。一九九二年のいま、国境をこえて、私たちが住む地球をまもる課題に積極的に取り組むことが必要だろう。

さあ、「サンダーバード」と一緒に、世界平和と環境保護、「地球をまもる」任務に向けて発進しよう。

（水島朝穂）

「地球をまもる」任務に、
サンダーバードと発進しよう。

